

吉備国際大学研究紀要
 (人文・社会科学系)
 第28号, 89-97, 2018

小学校教育課程教科「生活科」における主体的な学びに関する一考察 —地域素材や地域の人材を用いた単元について—

鳥居 恭治*・栗田 喜勝**

**A study on the Subjective learning in Elementary school curriculum “Life Environment Studies”
 —Lesson unit using regional materials and talents—**

Yasuharu TORII*, Yoshikatsu KURITA**

Abstract

Along with the revision of the guidelines for teaching elementary school, subjective learning in the “Life Environment Studies” has become important. Therefore, in this research, we examined what kind of learning situation the teacher involved is effective for subjective learning with reference to practical examples in elementary school.

Specifically, we considered the following 4 conditions under which subjective learning will be established: **A**- Activities that can raise children’s wishes, **B**- Activity exchanges and communicating activities, **C**- Creation of evaluation criteria to understand children’s activities, **D**- Supportive class making.

As a result the following things turned out. **A**; By going out to the area, there is a merit that the living space of the child spreads and can interact with the people of the area. As an issue, it is important to establish activities in children that can be utilized not only in lesson classes in the department of life but also in extracurricular studies in other subjects. **B**; It was effective to provide support to make the child listen to the story, to encourage children talk with each other, and to have opportunities for all children to present. Since it is time to learn how to talk, it is necessary to reduce the support of teachers in the future so that children’s activities and opinions can be exchanged. **C**; It can be said that teachers can respond immediately to **C** evaluation by assuming **A** and **B** standards beforehand and integrate evaluation and guidance. Also, by assuming the **A** standard, we can listen to children’s presentation with a clearance and can appreciate a good announcement. **D**; A

* 岡山市教育研究研修センター
 〒704-8115 岡山市東区向州1-1
*Okayama Municipal Center for Educational Research & Teachers’ Development
 1-1, Mukousu Higashi-ku Okayama-city, Okayama, Japan (704-8115)*

** 吉備国際大学心理学部子ども発達教育学科
 〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
*Department of Child Development and Education, School of Psychology, Kibi International University
 8, Iga-machi Takahashi-city, Okayama, Japan (716-8508)*

direct way of supporting classes is not shown in this teaching. Supportive class making is necessary according to each period of the grade by the teacher.

Key words : life environment studies, subjective learning, raise children's wishes, communicating activities, creation of evaluation criteria, supportive class making

キーワード : 生活科, 主体的な学び, 子どもの願いを高める, 伝え合う活動, 評価基準の創造, 支持的なクラス作り

1 はじめに

平成元年の学習指導要領の改訂において、小学校低学年に「生活科」が新設され、平成29年3月には3回目の改訂に向けて文部科学省から具体的な方向性が示された¹⁾。

これまでも、子どもの生活圏を学習の対象や場として体験や活動を行い、その活動を通して自立の基礎を培っていくことは、変わらずに大切にされている。

また、子どもが自ら願いを持ち、実現していくことを繰り返すことで、生活科の目標である「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成すること」ができることと明記されている。

生活科の授業実践で大切にしてきた、子どもの願いをくみ取り、実現のための活動を子どもと作りあげることがこれからも求められると考えた。そのために、今まで以上に子どもが主体的に学ぶための教育実践を行う必要がある。

2 「生活科」における課題

文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官 渋谷一典氏は、「生活科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」²⁾の中で、次の4点を気付きの質を高めるために挙げている。

1つ目は、試行錯誤や繰り返す活動の設定である。繰り返し自然現象と関わったり、試行錯誤して何度も挑戦することで、気付きの質を高め、事象を注意深く見つめたり予想したりすることで、見方考え方

の基礎を培う。

2つ目は、伝え合い交流する場の工夫である。一人一人の気付きを全員で共有し、高めていくことが大切である。

3つ目は、振り返り表現する機会のあり方である。活動したことや体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚だった気付きが自分の中で明確になり、それぞれの気付きを共有したり関連付けたり知ることが可能になることである。

4つ目は、子どもの多様性を生かし、学びをより豊かにする学習活動である。子どもの願いや思いに寄り添うことで、学習活動が多様な広がりを生み出し、多様な気付きを生むことになる。

3 「主体的な学び」の視点

主体的な学びを実現させるためには、子どもの生活圏にある学校、家庭、地域を学習の対象や場として直接何度も関わる活動を行うことが大切であると考える。そこでは、上記の1の試行錯誤する場が存在し、子ども自身が興味や関心を持って、自分の願いを実現していく取り組みができることと考える。

願いを実現していく活動は、子ども自身が願いを持つことができるようにすること同時に、上記2の自分の願いや実現したことを伝え合うことが必要となると考える。

伝え合い交流する中で、一人一人の発見が共有され、そのことをきっかけとして新たな気付きや願いが生まれたり、関係が明らかになったりすることが

考えられる。他者との協働や伝え合い交流する活動は、一人一人の子どもの学びを質的に高めるとともに主体的に活動することにもつながると考える。これが、上記の3につながっていると考える。

主体的な学びは、何度も対象と直接関わり、対象とのやりとりをする中で、感じ、考え、気付くなどする学びが豊かに展開されることと捉える。

友だちと一緒に活動することで、自分や友だちの発見や、楽しさを伝え合うことができるようになり、それが次の活動への願いを誘発し、主体的な活動が連続していくと考えた。これは、上記の4の活動の多様性につながると考える。

そこで、生活科の自分の願いを実現する活動において、願いを高めたり、活動を広げたり深めたりする時のきっかけとなる場の設定と、活動の交流など

を「主体的な学び」の観点から見直し、どのような教師の手立てが主体的な学びに有効かを第1学年「さあ みんなで かけよう」の単元で考えていく。

主体的な学びが成立する条件を以下のように考えた。

- A 願いを高める活動をするための場の設定ができています。
- B 活動の交流や伝え合う活動ができています。
- C 児童の活動を見取る評価基準ができています。
- D 支持的なクラス作りができています。

以下の考察においては、有効と考えられる手立ての部分に **A下線** のように表示した。

なお、実践例としては、平成27年度の高梁市立津川小学校での実践³⁾を参考とした。

4 実践事例による考察

第1学年 生活科学習指案

平成27年6月24日(水) 5校時 指導者 戸田 直美

1 単元名 さあ みんなで かけよう

2 単元の目標

- 公園を大切にしておもちゃを遊んだり自然に親しんで遊んだりすることができる。
- 友だちと工夫しながら公園で遊び、そのことを表現すると共に、公園の正しい利用の仕方について考えることができる。
- 公園は地域の人が利用するみんなのものであることや春から夏の草花や生きものに気付くことができる。

3 単元の評価基準

| 生活への関心・意欲・態度 | 活動や体験についての思考・表現 | 身近な環境や自分についての気付き |
|--|--|--|
| ○公園を大切にしておもちゃと遊んだり自然に親しんで遊んだりしようとしている。 | ○公園を利用する時の「やくそく」を考えている。(安全に・大切に使う・みんなで楽しく) ○自然環境を生かして工夫して遊び、それを表現している。 ○友だちの発表を聞いて思ったことや新しく遊びたくなったことなどを表現している。 | ○公園などの施設はみんなのものであり、それを支えている人がいることに気付いている。 ○春から夏の草花や生きもの更には自然の不思議さなどに気付いている。 |

4 指導上の立場

(1) 単元観

本単元は、学習指導要領生活科の内容(4)(6)を受けて設定した。ここでは児童が公共施設としての公園を安全に正しく利用すると共に、地域の様子(施設・手入れの跡)や自然などとの関わりを深めて、遊びや生活を広げることができるようにすることをねらいとしている。

そのためにまず、A公園の写真を見て公園で遊ぶ計画を立てる。次にB公園で遊んで楽しかったことを振り返ってお互いに情報を交換する。そしてAB最後に振り返った情報を基にして再び公園で遊ぶ計画を立てて遊び、活動全体を振り返るようにする。こうした活動を通して、公園は地域の人みんなが利用するところであり、公園を大切に利用することが大切であること、更には、自然(春から夏にかけての草花や虫)や友だちと触れ合って活動することの楽しさなどに気付くことができるようにする。

この単元でA出かける遊び場は、「カムカム公園」という学校から15分程歩いた所にある公園である。(平成15年竣工・町作り推進委員)園内に遊具はないが大きな広場がある。更にトイレや桜の木陰などもあり利用し易い公園になっている。地域の人たちは、ゲートボールやお花見をするなどして、この公園を時々利用している。一方草花では、シロツメクサ・タンポポ・ササ・ヒメジョオンなどの植生が見られる。生きものではテントウムシやダンゴムシなどの虫を見ることができる。

地域の人たちは、園内に案内板を立てて草刈りをしたり花を植えたりしながら、地域の公園を支えている。

公園の探検の際には、直接地域の人に出会うことはないと思われるが、草刈りの跡や公園の案内板などから、地域の人が公園を大切にしていることに気付くことができる。本単元では公園で遊ぶ活動を通して、こうした気付きを大切にしながら、地域の公園に愛着を持って公園を大切にしていこうとする心を育てていきたい。

(2) 児童観

児童はこれまでに学校探検や校庭探検、更には学校の周りの探検などを通して、いろいろな学校の施設や先生、上級生などと関わり、共に生活することを楽しみ生活空間を広げてきている。そして更に学校の周りの探検を通して、学校の周囲にも目を向けるようになってきている。また見つけたものや探検して楽しかったことなどを互いに発表し伝え合う活動にも活発に取り組んできた。特に校庭探検をした後の発表会では、遊んだことを発表したり聞きたいことを質問したりする活動に意欲的に取り組んだ。

しかし一方では、活動に入ると自分の思いを上手に相手に伝えられずに友だちとうまく活動できなかつたり、自分の思いを優先させて、みんなと仲よく活動できなかつたりする場面も見られた。そこで本単元「さあ みんなで でかけよう」を通して、遊びを工夫する中でルールを決めて活動することの楽しさや自然に親しみながら友だちと一緒に遊ぶ楽しさを実感させたいと考えている。

また本単元で取り上げる「カムカム公園」は、全員の児童にとって身近な公園とは言えない。幼稚園の時に遊び場として利用し慣れ親しんでいる児童もいれば、初めて公園に入るという児童もいる。このために本単元では、繰り返し公園に行くことで、公園に愛着が持てるようにし、誰にとっても身近に感じられる公園になるようにしていきたい。

(3) 本時の学習について

本時は、「カムカム公園」でB遊んで楽しかったことを発表し伝え合う活動を通して、もう一度公園に行っ

て遊ぶ計画を立てる場面である。まずB 1回目に遊びに行き楽しかったことを発表する。発表の後には、聞いてみたいことやすごいと思ったことなどを話し合うようにする。この活動は、児童が次にしてみたい遊びを決めるのに有効な活動であると考えている。そしてAB最後に、もう一度公園に行き遊ぶことを考えて発表をする。公園で遊んだことが想起できる公園の地図や「絵カード」などを基にして、児童が主体的に次の遊びを決めていけるように支援していきたい。

(4) 研究主題との関わり

○児童の興味・関心を引き出す工夫について

- ・どの児童も探検は大好きである。「カムカム公園」への探検では、見学の計画を立てる時に、A公園の写真を見せて探検場所への興味・関心を高めたり、たんけんブックなどを活用して、どんな草花が見つかるか、どんな遊びができるかなど活動への期待感を高めたりする。
- ・A「カムカム公園」への探検を2回行うことで、活動にひたりながら児童の思いや願いが十分かなえられるようにする。

○個に応じた適切な支援について

- ・C特別に支援を必要とする児童には、次のような支援を行い落ち着いて安全に活動ができるようにする。
- ①興味・関心があるものには夢中になるため「やくそく」を忘れがちになる児童については、支援の先生と連携を密にして指導を行う。
- ②活動の見通しが持てるように「何番目に発表するよ。」「笛が鳴ったら〇〇に集まるよ。」など活動の予告をする。
- ③公園での活動の順番や「やくそく」などを紙に書いて掲示し、何度も確認できるようにする。
- ④活動を認める声掛けをしっかりと行い、自信を持って意欲的に活動できるようにする。
- ・C単元の評価基準表を作成し、いつでも児童の反応に合わせて、適切に対応できるようにする。

5 指導と評価の計画 (全9時間)

| 次 | 主な学習活動 | 教師の指導・支援 (○) と評価基準 (◎) |
|------------|--|--|
| 第一次 第1時 | ○入学前に行った身近な遊び場で遊んだことを紹介し合う。 | |
| | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">「カムカム公園」に行き遊ぶ計画を立てよう。</div> <p>○どんなことをして遊ぶか考えたり持って行く物を考えたりする。</p> <p>○遊ぶ時に、どんな「やくそく」が大切か話し合う。</p> | <p>○<u>A「カムカム公園」の写真(全体の写真)や「たんけんブック」を見ながら、どんな遊びができるか考えさせる。</u> (草花遊び・虫さがし・おにごっこ)</p> <p>○「カムカム公園」の写真(草刈りの跡・公園の案内板)を見せ、公園を手入れして利用している人たちがいることに気付かせる。そして「たんけんブック」などを参考にして次の3つの観点から公園を使う時の「やくそく」(ルールやマナー)を考えさせるようにする。</p> <p>①安全に遊ぶ。 ②公園を大切に。 ③みんなで楽しく遊ぶ。</p> <p>◎「やくそく」を守って利用することが大切であるということを考えている。(思考・表現)</p> |

| | | |
|----------------------|--|--|
| <p>第2・3時</p> | <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">「カムカム公園」で遊ぼう。</p> <p>○<u>A遊び場で楽しく遊ぶ。</u></p> | <p>○同じ遊びをしたい子ども同士が集まってもよいが、別のグループに移ることも認め、児童の思いや願いが満足できるようにする。</p> <p>○グループ同士の情報交換が自然にできるように、「○○さんたちは○○を見つけたよ。」などと適宜、声を掛けるようにする。</p> <p>○「公園の案内板に何と書いてあるの。」「お花は誰が植えたの。」などの質問が児童から出されたら、2回目の活動で公園の近所の人に尋ねるようにし、地域の人と関わることを大切にしている。</p> <p>○遊びの様子を写真に撮り活動したことが後で想起できるようにする。</p> <p>◎「やくそく」を守って友だちと仲よく遊んだり自然に親しんだりして、活動しようとしている。(関心・意欲)</p> <p>◎春から夏の草花や生きもの更には自然の不思議さなどに気付いている。(気付き)</p> |
| <p>第4時</p> | <p>○遊んで楽しかったことを「絵カード」にかいて発表の準備をする。</p> | <p>○遊んでいる時のよい気付きが表現できていない児童には写真などで想起させ表現できるようにする。</p> <p>○「絵カード」は公園地図に貼っておき、いつでも見られるようにしておく。</p> <p>○<u>B発表に必要なもの(発表する「絵カード」・持ち帰ったものなど)を選んで発表の準備をする。</u></p> <p>○公園内に見られる草花の写真を公園の地図に貼っていく活動を通して、初夏の自然にも目が向くようにする。</p> <p>◎遊んで楽しかったことを「絵カード」にかいて発表の準備をしている。(思考・表現)</p> |
| <p>第5時</p> | <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">もう一度「カムカム公園」で遊ぶ計画を立てよう。</p> <p>○どんなことが楽しかったか、友だちの発表を聞いて、もう一度遊びに行く計画を立てる。</p> | <p>○<u>B「絵カード」だけでなく持ち帰ったものなども使って、分かりやすい発表になるように助言する。</u></p> <p>○2回目の活動の計画を立てる。(やってみたいこと・準備するもの)</p> <p>◎友だちの発表を聞いて、今度はどんな遊びをするか考えている。(思考・表現)</p> |
| <p>第二次 第6・7時</p> | <p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">もう一度「カムカム公園」で遊ぼう。</p> <p>○<u>A計画をもとにして2回目の活動を楽しむ。</u></p> | <p>○計画したことを基にして遊びを楽しむ。</p> <p>◎計画したことを基にして、友だちと仲よく遊ぶ。(関心・意欲)</p> <p>◎春から夏の草花や生きもの更には自然の不思議さに気付いている。(気付き)</p> |
| <p>第8時</p> | <p>○遊んで楽しかったことを「絵カード」にかいて発表の準備をする。</p> | <p>○教室に帰り<u>B遊んで楽しかったことを「絵カード」(1回目にかいた絵カードの色とは異なる色のカード)にかかせ、活動の広がりや深まりが感じられるようにする。</u></p> <p>○<u>B発表に必要なもの(発表する「絵カード」・持ち帰ったものなど)を選んで発表の準備をする。</u></p> <p>◎遊んで楽しかったことを「絵カード」にかいて発表の準備をしている。(思考・表現)</p> |

| | | |
|-----|---------------------|--|
| 第9時 | 遊んで楽しかったことの発表会をしよう。 | |
| | ○遊んで楽しかったことの発表会をする。 | ○「絵カード」だけでなく持ち帰ったものなども使って、分かりやすい発表になるように助言する。 ◎友だちの発表を聞いて、聞いてみたいことやすごいと思ったことなどを発表している。(思考・表現) ◎公園などの施設はみんなのものであり、それを支えている人がいることに気付いている。(気付き) |

6 本時案 (第一次第5時)

| 目標 | 「カムカム公園」で遊んで楽しかったことを発表し合う活動を通して、もう一度公園に行って遊ぶための計画を立てることができる。 | | |
|-------------------------|--|--|------------------------------------|
| 学習活動 | 教師の発問と児童の意識 | 教師の指導・支援○評価◎ | 準備物 |
| 1 めあてを確認する。 | ○カムカム公園で遊んでしっかり楽しめましたか。 ・はい。とても楽しかった。 ・まだやりたいことがあります。 ○もう一度だけ行きます。今度はどんな遊びをするか、友だちの発表を聞いて考えよう。 ・友だちはどんなことをして遊んだのかな。 ・次は、何をしようかなあ。 | ○公園地図(「絵カード」や写真を貼った物)や発表で使った物などを教室に整えて環境を支援し、遊んだことが具体的に想起できるようにする。 ○ <u>AB</u> 今度はどんな遊びをするかを考えるためには、友だちの発表をしっかりと聞くことが大切であることを伝え、聞く構えを作る。 | 公園地図(写真・「絵カード」入り) |
| 「カムカム公園」でどんな遊びをするか考えよう。 | | | |
| 2 遊んで楽しかったことを発表する。 | ○遊んで楽しかったことを発表しよう。 ・草花遊びをしました。シロツメクサで輪飾りを作ったのが楽しかったです。 ・虫さがしをしました。ダンゴムシをたくさん見つけたのが楽しかったです。 ・おにごっこをしました。かくれるところがたくさんあったので楽しかったです。 | ○発表メモ(「したこと」「楽しかったこと」)や質問メモ(地図に掲示してある「絵カード」を見て聞きたいと思ったこと)を簡単に作成し、コミュニケーションがうまくできるようにする。 ○ <u>B</u> 3人ずつ発表させた後、「 <u>聞きたいこと</u> 」や「 <u>すごいと思ったこと</u> 」を言わせ、友だちと関わられるようにする。 | 教材提示装置 絵カード 実物(草花・虫) |
| 3 次に遊びたいことを決めて発表する。 | ○友だちの発表を聞いて、次はどんなことをして遊びたいか考えよう。 ・ぼくは、○○を作ってみたい。 ・わたしは、○○をやってみたい。 ・おにごっこが楽しかったので、みんなでやりたい。 | ○遊びたいことが決まりにくい場合には声を掛けて話を聞き、自分の思いに気付けるようにする。 ○ <u>B</u> 次にやりたいことを理由をつけて発表するようにし、 <u>自分の思いがしっかり表現できるようにする</u> 。 ○ <u>A</u> 子どもの発表を板書し次の活動への意欲を高める。 ◎発表を聞いて、今度はどんな遊びをするか考えている。(思考・表現) | |

| | | | |
|------------------|--|--|-------------------|
| <p>4 まとめをする。</p> | <p>○遊びに行く時に、持って行った方がいい物がありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・虫取りの網やかご ・たんけんブック ・たんけんバック <p>○みんなで決めた「やくそく」は守れたかなあ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今度は、○○を気を付けよう。 | <p>○準備するものや遊ぶ時の「やくそく」(みんなが守れたことに赤丸がついている。)について考えることで、2回目の活動で、一人ひとりの思いや願いが達成できるようにする。</p> | <p>みんなの「やくそく」</p> |
|------------------|--|--|-------------------|

7 Cルーブリック評価基準表 (第一次 第5時を抜粋)

| 評価基準 | A基準 | B基準 | C基準 |
|--|--|--|---|
| <p>思考・表現 友だちの発表を聞いて、今度はどんな遊びをするか考えている。</p> | <p>友だちの発表を聞いて今度はどんな遊びをするか、理由もつけて意欲的に発表している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今度は○○をしてみたいなあ。なぜかというと○○だからです。他にもやってみたい遊びがたくさんあるよ。 | <p>友だちの発表を聞いて今度はどんな遊びをするか、理由もつけて発表している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今度は○○をしてみたいなあ。なぜかというと○○だからです。 | <p>友だちの発表を聞いても今度はどんな遊びをするか、なかなか決めることができない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今度は何をして遊んだらいいのかな。 ・やってみたい遊びはなかったよ。 |

5 実践成果の考察と課題

1) Aについて

地域の公園に2度行くという単元の構想と活動の初発での活動場所の公園の写真や探検ブックを見せる手立てで、子どもに活動への興味・関心を高めたり、期待感を高めたりすることができていた。

1年生の6月という時期で、学校探検で学校中を探検した楽しさを経験した子どもたちの次の活動を地域に向けることに有効な手立てと考えられる。

そして、地域に出かけることで子どもは、自分の願いを実現するとともに、友だちの活動を見たり、友だちの活動したこと聞いたりすることで、次に自分のしたいことを決めることができていた。

また、地域に出かけることで、子どもの生活空間が広がると同時に、地域の人との交流もできるという良さも設定されていた。

課題としては、1年生の6月での活動経験を今後

の生活科の授業だけでなく、他の教科での校外学習にも生かすことができる活動での約束を子どもに定着させることである。

2) Bについて

単元を通しての手立てでは、公園での活動後に楽しかったことを紹介し合い、次の活動を定めるための話し合いを行ったり、2回目の活動の後にも楽しかったことや見つけたことの紹介を設定している。

本時では、子どもが話を聞く構えを作る支援や子ども同士の話し合いを促す支援が3つ記されている。

授業では、全員発表もすることができていたので、これらの支援が有効だったと考えられる。

課題としては、1年の6月なので、話し合いのやり方を学習している時期であるので、今後、教師の支援を少なくとも子ども同士で活動や発言の交流ができるようにして行くことである。

3) Cについて

8頁のルーブリック評価基準で、教師の支援がすぐに必要なC基準、目標が達成できていると考えるB基準、目標を十分に達成できていると想定されるA基準を具体的な姿として作っている。

これらの姿をあらかじめ授業者が想定しておくことで、次の活動を決めることができない子ども（C評価）には、すぐに支援ができ、評価と指導の一体化ができていると言える。

また、A基準を想定することで、子どもの発表をゆとりを持って聞くことができ、良い発表を称揚したり理由をつけていることを称揚したりすることができていた。

4) Dについて

支持的なクラス作りについての直接的な手立ちは本教案には記載されていない。

入学して3ヶ月での支持的なクラス作りは、すべての教科や道徳、特別活動などのすべての時間において子どもと教師で作り上げる必要があり、現在教師主導でできつつあると感じられた。これは、学級作りの基本であり、これができてないと対話的な学びではなく、教師の一方的な教授にしかなり得ないと思われる。

支持的なクラス作りは、学年のそれぞれの時期に応じた手立てが必要で、これでいいという終わりはないと思われる。そのクラスの弱点を教師が見つけ、手立てを変えながら行っていくことが課題である。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 2017 小学校学習指導要領第2章第5節「生活」 pp.94-97.
- 2) 初等教育資料 2017 11月号 pp.38-43.
- 3) 高梁市立津川小学校 2015高梁東中学校区「知」の部会 授業研究会資料 pp.1-5.